

# 書評

Jean-Michel Salanskis

*L'emotion éthique : Levinas vivant I*

KLINCKSIECK、2011年、200頁

布施 哲朗\*

## 1. はじめに

本書は、現代フランスの哲学者であるジャン＝ミシェル・サランスキ(1952-)の著作である<sup>(1)</sup>。日本での紹介は数少ない例外を除いて、著作の抄訳などにとどまるが、その思索の重要性は言を俟たない<sup>(2)</sup>。この著作の副題の通り、本書は戦後フランスの現象学の展開を主導し、後進に多くの影響を与えた哲学者エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)に対する論文集である。

本書はレヴィナス哲学の研究書であるが、本書の著者であるサランスキは哲学のみにその思索を閉じ込めているわけではない。そもそも、サランスキは最初の学位(D.E.A)を純粋数学の領域で取得した。その後ジャン＝フランソワ・リオタール(1924-1998)に師事し、哲学とエピステモロジーの分野で研究を重ね、1986年に哲学で博士号を取得した。そして最初の著作は『形式解釈学—無限・連続・空間』と題され、ハイデガーの解釈学を数学の哲学の分野に拡張することで、ジャン・カヴァイエス(1903-1944)が始祖とされる、「概念の哲学」として知られるフランス・エピステモロジーの系譜とは異なる形で、自らの思索を樹立させた。また近年でも『数学の哲学』や『計算可能性の世界』など、その数学的素養を存分に活かしたものや、さらに、その思索の中で重要な役割を果たす現象学に対する理解から、エドモンド・フッサール(1859-1938)、マルティン・ハイデガー(1889-1976)、ジャック・デリダ(1930-2004)を対象にしたもの、そしてさらに、ユダヤ性を題材にした複数の系譜の著作を出版している。これらの著作を支える思想はサランスキの思索の中で独立した関心ではなく、交錯したものである<sup>(3)</sup>。

このように多様なサランスキの著述であるが、その哲学的企図として最

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程 u669961h@ecs.osaka-u.ac.jp

も中心的なのはやはり、数学を対象にしたそれであるだろう。中村(2020)によれば、サランスキの思索は、現代フランスにおける現象学とエピステモロジーの両面から自らの思索を展開するするシュザンヌ・バシュラール(1919-2007)、ジャン＝トゥサン・ドゥサンティ(1914-2002)の一連の系譜に属すると言えるが、先述したように、そのカヴァイエスに対する態度から異なる存在感を発揮する。であるが故に、この問題系において、我々はサランスキの哲学の特異性から重要性を認めることは容易であるだろう。

しかし同時に、そのような重要な仕事の他に、このような多様な仕事をすすめるサランスキの動因は何であるのか。本書はサランスキが自身の思索において特別な地位を与えるレヴィナスに対して記されたものであるため、サランスキ自身の思索を理解するためにも重要な参照点となるだろう。本書評では、このような多分野にまたがって思索を展開する哲学者によって、どのようにレヴィナスが読み解かれているかを検討する。この目的を二つの命題として言い換えれば、レヴィナスの思索がサランスキの読解によっていかに開かれているか、さらに、サランスキの読解格子におけるレヴィナスの重要性は何か、をわれわれは思考しようとする。

次節ではまず本書の内容を総覧しようと試みる。次々節で、サランスキの思索においてレヴィナスがどのように「開かれて」読解されているかに着目して評価する。

## 2. 本書の梗概

本書は序章と用語辞典を除いて全体が3部に分かたれ、さらにそのそれぞれが複数の章に分割された構成になっている。全体として、それぞれあるテーマを切り口にしてレヴィナスを各論的に論じている。以下確認する。

第一部「倫理の中核 *Le noyau éthique*」では、しばしば「他者」とその関係、そこに必然的に発生する「倫理」を論じた哲学者として位置付けられるレヴィナスを、さまざまな観点から論じる。「レヴィナスと存在のプロセス *Levinas et le procès de l'Être*」と題された章では、サランスキはレヴィナスの存在論に関して次の三つのテーゼを抽出する。それぞれが (1)「存在への努力 *Le conatus essendi*」(2)「他人に対する認識的態度 *L'attitude épistémique à*

l'égard d'autrui」(3)「存在論的中立の非意味性 *Le non sens de la neutralité ontologique*」として定式化され、その後この三つを探求していく。また、「レヴィナス：ある道徳の哲学 *Levinas : une nouvelle philosophie de la morale*」と題された章では、レヴィナス哲学がしばしばその中心概念として帰せられる「倫理」において、その「倫理」の内実はメタ倫理学かレヴィナスに固有の「倫理」か、という観点からさまざまな分析が行われる。その時比較対象となるのはさまざまな倫理学の蓄積である。この作業によってレヴィナスの「倫理」の特殊性が浮かび上がる。さらにこのレヴィナスが持つ特殊性はフッサール、ハイデガーから学統を引き継ぐレヴィナスの持つ「現前」に対する顕著な着目から由来するものであることが示される。そして「レヴィナスとユダヤ教 *Levinas et le judaïsme*」では、小論ながら、レヴィナス思想の源に置かれるユダヤ的側面について簡単に触れ、その中でレヴィナスがフランツ・ローゼンツヴァイクの影響から受け継いだ、その哲学における「西洋／ユダヤ」という二重性を指摘している。第一部のみならず、本書全体において、サランスキはしばしば、レヴィナスの哲学の発展においてタルムードの読解が果たした役割を重視する。第一部において論じられた存在論、倫理学の観点においてもそれぞれ読者にタルムードやミトヴァーに参照が求められる。

第二部「レヴィナス哲学の合理性 *Rationalité levinassienne*」では、西洋哲学史においてさまざまに論じられてきた問題(「個と普遍」、「空間」)が論じられる。「レヴィナスにおける普遍と個 *L'universel et le particulier chez Levinas*」においては、「個 *le particulier*」と「普遍 *l'universel*」の関係、そしてこの問題系における「特異性 *singulier*」の議論において、レヴィナスの哲学がどのように機能するかを検討する。この問題をサランスキ自身は「論理学において本質的な問題である」と述べ、カント、ヘーゲルの議論を参照しつつ、そこから距離をとるように、フッサール現象学の純粹自我の概念やその現象学に対する方法論を範にとって、レヴィナスの哲学による「特異性」に接近する。また、「レヴィナスと空間の問い *Levinas et la question de l'espace*」において、西洋哲学においてさまざま論じられてきた空間の問いとレヴィナス思想の接点が紹介される。「空間の問題(空間とは何か)」はサランスキにおいては、「無限とはなにか」「連続とは何か」と並ぶ、数学における指導的な問いの一つであり、「謎 *enigma*」として名指される<sup>6)</sup>。本章の内容は特に、

サランスキ自身の主著とされる『形式解釈学』との連続性が高い。

第三部「旧世紀とその未来 *l'ancien siècle et son future*」は前半で「レヴィナスとペシミズム *Levinas et le pessimisme*」と題してレヴィナス思想における「ペシミズム」を検討する。ここでは、キルケゴールやショーペンハウアーらの思想との比較として、レヴィナス自身が同時代的に経験した「絶滅」を鍵語に、レヴィナスが持つ「ペシミズム」的側面の評価が試みられる。そして最後に、「現代フランスにおけるレヴィナス哲学 *Une philosophie lévinassienne en France aujourd'hui*」と題された章では、サランスキの観点からフランス思想におけるレヴィナスの位置付けを論じたのちに、60年代、70年代のフランス哲学、「フランス現代思想」の中でのレヴィナスの持つ系譜と独自性の評価がされる。

### 3. 本書の評価—哲学が「純粹化」されるとき

本書はレヴィナス哲学における存在論、倫理学の検討、数学の哲学への拡張可能性、ユダヤ性、同時代的位置づけなどを見ていくものであった。本書はそもそも3分冊からなる大著の1冊であるから、本来ならばその思索全体を論じるためにはより長大な紙幅を必要とする。そのため、本書評においては論点を限定して、この著作の持つ、サランスキの思索に近づかんとする読者のために本書が果たす機能を考察する。そのきっかけとなるのは、「数学の哲学者」サランスキにおけるレヴィナスの現象学、ユダヤ思想的側面に対する絶えざる参照の両立である。

レヴィナス哲学が現象学に端を持つことに由来する機能を、本書全体に渡って展開されるさまざまな論点において、サランスキは明らかにする。その注目はサランスキの持つレヴィナス読解の特徴として顕著である。確かに、レヴィナスの哲学が現象学の系譜から本懐を受け継いだもの、つまり現象学的特徴にその多くが規定されるものであることは重要な特徴であり、そしてレヴィナス哲学を理解するためにこの側面を見過ごすことはできない。サランスキのレヴィナス読解は、このレヴィナス現象学の読解の拡張可能性を探求したものとみなすことができるだろう。この点を鑑みれば、先述したように、第二部においてサランスキがレヴィナスを哲学史におけるテ

一マ系（個的なものと普遍的なもの、空間の問い）などに位置付けて評価することは読者にレヴィナス哲学の位置付けを図示することを機能している。各論的にレヴィナスを論じるサランスキの読解格子によって、レヴィナスの多様なテーマにまたがるその思索の全体が、その現象学的な出自に極めて明確に規定されていることが逆説的に表現されるためである。同時代的な言説を支える哲学者であるジル・ドゥルーズ(1920-1995)ら、「フランス現代思想」の哲学者たちに対して、レヴィナスにおいてはやはり特権的な哲学者はフッサールであり、そして何よりもハイデガーであること、これはつまり彼らから受け継いだ現象学こそが、レヴィナスにおける哲学の決定的な方法論であることをサランスキは示している。

これまで見てきたように、本書にとどまらず、サランスキはレヴィナスの現象学的拡張として自らの哲学を展開する。しかしむしろ、このサランスキの読解は、「ユダヤ性」として言及されるレヴィナスの側面を切断したものではない。本書でも特徴的に、サランスキはレヴィナスにおける「ユダヤ性」を積極的に評価する。レヴィナス研究においては、レヴィナス自身の著作出版に対するその態度から、レヴィナス自身のユダヤ性をその哲学思想と区別することが試みられてきた<sup>(4)</sup>。しかし近年のレヴィナス研究における「ユダヤ性」への着目も手伝って、レヴィナスの広がりをも明らかにせんとする、サランスキのレヴィナス読解の重要性は増していると考えられる。

本書においては、サランスキがその思想において代表的な形で言及される分野とレヴィナス哲学の接続、つまり本書評の第一節で触れた「数学の哲学」に対する言及は主に第二部の範囲にある。そのため、サランスキの主たる読者は、第二部を集中的に読解するだろう。しかしむしろ、これまで確認してきたように、倫理学／メタ倫理学、ユダヤ性、数学の哲学らをサランスキが論じる際に、レヴィナスの現象学からくる装置がいかに関節するか、そしてそれのみにとどまらない多様な側面を丹念に論じる本書全体にわたって共通するその姿勢こそが、いかに現象学とユダヤ性がレヴィナスにおいて、そしてサランスキの思索において中心的な役割を演じるかを、窺い知るのに役立つものである。サランスキが自らの思索において中心的な地位を与えるその「解釈学」をレヴィナスによる基礎づけを要求する際に必要とする現象学の装置は本書の随所に現れており、そして同時に、そうしながらも、「ユダヤ性」に絶えず注目を惹起されるサランスキにも、また、現れている。

このことはレヴィナスとサランスキの哲学のみにとどまらない。われわれは哲学を純粹理論として読む際に何を無視しているのだろうか。両者の思索はわれわれにこれを示してはいないか。

#### 4. おわりに

本書評は冒頭に掲げた通り、ある目的を持つ。それは、本書を読解することで、本書の持つ二つの性格をみてとるものであった。ひとつはレヴィナスの思想の可能性を開くものとして、もうひとつはサランスキ自身の思索を検討するものとして、である。レヴィナスを各論的に読み、その中でサランスキがレヴィナス哲学において「特異性」を見出す点や、レヴィナスにおける「空間の問い」を自らの思索に連続させるなど、サランスキのレヴィナス読解は注目に値する。また、サランスキはレヴィナスの哲学を「純粹哲学」以外の背景から多面的に読み込むことの魅力を本書で示している。レヴィナスの哲学を「生けるレヴィナス」として拡張していくサランスキの本書における読解は同時に、「数学の哲学」にとどまることのないサランスキの哲学が持つ、その射程と魅力にわれわれが近づくと一助となるものであると思われる。本書は「純粹哲学」に拘るわれわれ自身の視野を拡張する。

#### 注

- (1) 本書は2006年に別の版元から出版された同名の著作の増補改訂版である。
- (2) その主著である『形式解釈学』やその他の著作を例にあげて、その思索を本書と共に確認することはできなかったが、この観点からの読解に関心がある読者は参考文献にある唯一の例外であるところの中村(2020)を参照してほしい。
- (3) 本書でも、各所でレヴィナスを例にとりながら「ユダヤ性」、「数学の哲学」を考察する際に自らの著作への参照が行われる。また、サランスキの経歴の紹介は中村(2020)を参照した。
- (4) レヴィナス自身が自らの思想をユダヤ思想のみに閉じ込めて受容されることを嫌い、そしてタルムード読解などの著作の出版を、西洋哲学を対象とした著作と出版社を異にすることを生涯貫いたことも、傍証の一つである。
- (5) 中村(2020)の pp. 230-251 における記述を参照すれば、Salanskis(2013)において、サランスキは「解釈学」の対象として数学における「謎」を例にとる。このサランスキの「謎」に対する態度は同じくエピステモロジストのアルベール＝ロトマン(1908-1944)の「問い」のそれと対照的であるとされる。本書評でも度々言及したように、フレンチ・エピステモロジーと名指される一群の内、サ

ランスキはしばしば特異性を発揮する。このことからわれわれは、サランスキの哲学を参照することで開かれる可能性と、その差異が何に由来するかを明らかにする必要性を呼び起こされるだろう。

## 参考文献

- 中村 大介 2020『数理と哲学 カヴァイエスとエピステモロジーの系譜』青土社。  
Salanskis, Jean-Michel. 2013. *L'herméneutique formelle. L'infini, le continu, l'espace.*: Klincksieck.